



神奈川県立 公文書館だより

第45号

編集発行

神奈川県立公文書館

〒241-0815 横浜市旭区中尾1-6-1

電話 045 (364) 4456

FAX 045 (364) 4459

https://archives.pref.kanagawa.jp/

第9回 県立図書館・公文書館合同Web展示 「パンデミックを生き抜くために」神奈川県と感染症の歴史」 令和3年2月2日～3月31日

今回で9回目となった県立図書館・公文書館合同展示は、新型コロナウイルスの感染が拡大する中、Web展示として開催されました。

過去に襲ってきた感染症によって、私達がいかに苦しめられ、パンデミックを生き抜くためにいかに知恵を絞ったのか、保存されている資料から窺い知ることが出来ます。今回はその一部を駆け足で紹介いたします。

※このWeb展示は、公文書館ホームページでご覧いただくことができます。(展示・講座等のタブ↓合同展示↓過去の合同展示情報)

1 「流行性感冒の歴史」

―前近代の流行り風邪―

◆風邪は万病のもと

―古代中国由来の疾病観―

「風邪は万病のもと」というのは病気に関する有名なフレーズですが、これは古代中国の医学・科学書である『黄帝内経』の一節「風者百病之长也」がそのルーツです。古代中国では、悪い風が入ると人の体を損ない、さまざまな病気を引き起こすと考え、それを風邪(ふうじゃ)と呼びました。現在でも破傷風や痛風・風疹のように、病気の名前にしばしば

風の字が使われているのは、こうした病気に対する観念の名残です。

◆海外から吹き込む風邪

『園大暦』康永四(一三四五)年九月十二日条に「唐船(海外貿易船のこと)帰朝之時」に風邪の流行が起こるとあるように、感染症流行の原因として外国との接触をあげる史料が散見されます。前近代には風邪をはじめとする感染症は、西から東へと流行が広がるのが通例でした。これは外国との窓口であった太宰府や博多、長崎、琉球などから病気が侵入し、次第に東へと蔓延したことによると考えられます。

◆流行り風邪と改元

災害を払うために元号を改めることを災異改元といいます。『扶桑略記』延喜二十三年(九二二)年閏四月十一日条には「天下咳疫」により延長へと改元するとされており、流行り風邪で多数の死者が出たため改元が行われたことがわかります。

◆咳除け信仰のおしゃもじさま

関東から中部・近畿地方にかけての咳除けの信仰が見られます。「お供えしてあるしゃもじを一本いただいて帰り、喉を撫でたり、ご飯をよ



上 高田のおしゃもじさま
(社宮神小田原市高田)
下 お堂に納められた大量のしゃもじ



「おしゃもじ神ノ記」(当館寄託飯田家文書「大正十一年十月号附録の1」二十七冊)ID:200710342より

そって食べさせたりすると咳が治る。お札には新しいしゃもじを添えて二本にして納める。」といった民間信仰で、神奈川県内にも数十ヶ所のおしゃもじさまがあるとされています。なお、本年十一月五日に横浜市内のおしゃもじさまが、横浜市指定有形民俗文化財に指定されました。おしゃもじさまの由来は諸説あるようですが、医療の恩恵に預かることが難しかった人々の切なる願いが寄せられた神様ということができそうです。「おしゃもじ神ノ記」には、この信仰が挿絵と共に紹介されています。(担当:渡辺真治)

**2 「スペイン・インフルエンザ」
100年前のパンデミックの記
録と記憶**

過去に我々を襲った感染症の中でも最大級のパンデミック（世界的流行）をもたらしたのは約百年前（大正七（一九一八）年～大正九（一九二〇）年）の「スペイン・インフルエンザ」（当時は「流行性感冒」、「世界風」などと呼称）でした。その流行状況は、残された様々な資料から窺い知ることができます。

※太字で示された資料は、ホームページから内容を確認することができますので、是非ご覧ください。

**第1章 数字とグラフで見える
スペイン・インフルエンザの流行**

我が国におけるスペイン・インフルエンザの罹患者数は全国で約2,380万人、神奈川県内で約35万人、死亡者数は全国で約39万人、神奈川県内で7,587人とされています。

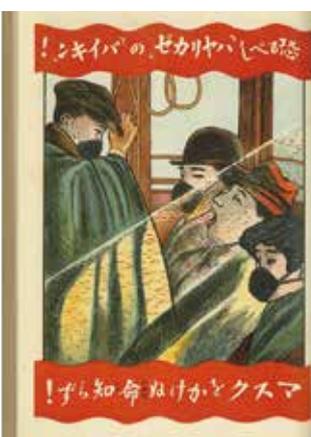
これら数値の出典となった基礎文献は、日本全国については内務省衛生局が編集した公的な報告書である『**流行性感冒**』（復刻版は県立図書館所蔵）、神奈川県については県の警察部（当時県内の衛生業務を担当）が編集した『**大正七、八年／大正八、九年 流行性感冒流行誌**』（県立図書館所蔵）です。感染の現場における生々しい資料としては、大正九（一九二〇）年一月の逗子町内における流行性感冒の新規罹患者数

を郡役所へ報告した『**衛生日報**』が歴史的公文書として当館に保存されています。

**第2章 国と県による
インフルエンザ対策**

大正七（一九一八）年、内務省衛生局から全国府県に対して、特に生活に窮乏した罹患者に対する、恩賜財団済生会（貧窮民に対する医療救済のために設立された財団）を通じた医療の提供が要請されました。また、内務省からは、予防のための注意事項が詳細に書かれた『**流行性感冒予防心得**』や啓蒙ポスターが全国に配付され、神奈川県においても、衛生課や工場監督課から各方面に連絡がなされ、『**流行性感冒の注意**（はやりかぜのきをつけかた）』など予防心得書が配布されています。

大正九年（一九二〇）年に配布された感染防止策を啓蒙するポスター（国立保健医療科学院図書館所蔵 内務省衛生局著『**流行性感冒**』一九二二年三月発行より）



当時も予防対策として重視されたマスクは、当初「呼吸保護器」と呼ばれていました。また、予防注射

が奨励された状況の一端を、当館に寄託された私文書『**入営兵流行性感冒予防注射二関スル件**』（原久三氏所蔵文書）から垣間見ることがができます。

**第3章 『横浜貿易新報』に見る
インフルエンザの猛威**

「神奈川県新聞」の前身である「横浜貿易新報」は、神奈川県内の各地で日々猛威を振るうインフルエンザの流行状況をつぶさに報道し、貴重な記録を残しています（Web展示には感冒関連記事の一覧表あり）。

同紙に定期的に寄稿していた歌人・与謝野晶子は、自らの家族も感染する中、教育や医療の現場や政府の対策の不備を鋭く突き、経済格差の問題にまで言及する評論文を二度にわたって寄せています。

『**感冒の床から**』大正七（一九一八）年十一月十日付、『**死の恐怖**』大正九年十一月二十五日付

与謝野晶子「感冒の床から」『横浜貿易新報』大正七（一九一八）年十一月十日付
【公文書館所蔵マイクロフィルム所蔵】



**第4章 パンデミック下を生きる
人々の思い**

スペイン・インフルエンザの猛威は、皇族、政府要人（原敬首相他）から都市生活者、農業従事者など社会のあらゆる階層に及びました。公刊された日記や書簡などからは、家族・友人との濃密なやり取りも垣間見ることがができます。また、パンデミックに遭遇した市井の人々が何を思い日々を生きていたか、私文書として残された資料から当時の人々の記憶が蘇ります。（**大正八年当用日記**）小池駿一氏関係資料ほか）
〔担当：木本洋祐〕

公文書館の利用案内

現在、感染防止対策を徹底の上、資料の閲覧及び会議室の貸出しを行っていません。

資料の閲覧については、当館ホームページの収集資料検索システムにより閲覧希望資料を指定いただいた上で電話してください。また、会議室についてはご利用いただける会議室と定員、利用時間を制限していますので、ホームページをご確認ください。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。